

『現観荘嚴論』トルポパ註における仏身

谷口富士夫

はじめに

『現観荘嚴論』 *Abhisamayālaṅkāra* (以後, AA) 第 8 「法身章」は仏身論を説いたテキストとして知られ、そこに説かれるのが「自性身, 受用身, 變化身」という三身説なのか、それに「(智) 法身」を加えた四身説なのかが後世の註釈者たちの議論的となった。インドにおいてはハリバドラ *Haribhadra* が四身説の紹介者として知られ、ラトナーカラシャーンティ *Ratnākaraśānti* やアバヤーカラグプタ *Abhayākaragupta* が三身説の立場からそれを批判した。後伝期 (*phyi dar*) のチベットでは AA をハリバドラによる註釈『明義』 *Sphuṭārthā* に基づいて理解するのが、標準とされてきた。ところが他空説の唱道者として知られるトルポパ・シェーラプギェルツェン *Dol po pa Shes rab rgyal mtshan* (1292–1361) が著した AA に対する註釈書『経義の容易な理解』 *mDo'i don bde blag tu rtogs pa* (以後「トルポパ註」) では、ハリバドラ註がほとんど用いられない¹⁾。また、AA を祖述するというよりは、テキストを利用して自らの思想を展開する傾向が強い。そのようなトルポパ註は、AA に説かれる仏身論についても三身説と四身説に拘泥せずに解釈しようとする。

本稿では、トルポパ註が通常の三身説でも四身説でもない、どのような仏身論を展開しているのかを明らかにすることを目的とする。

1. AA をめぐる三身説と四身説

AA 「法身 (*dharmakāya*) 章」の説く仏身論が三身説なのか四身説なのかに関する先行研究には、磯田 (1985)、佐久間 (1992)、Makransky (1997)、田中 (2009)、Nakamura (2010) など、多くある。それらによると、三身説と四身説の論点は大きく二つに集約される。一つは AA 第 1 章第 17 偈をどう読むかであり、もう一つは第 8 章第 6 偈をどう解釈するかである。むろん、自性身と法身が同一なのか別

異なるのかという教義上の問題があることが一番の背景にある。

トルポバはその議論を知りつつも²⁾、仏身の数は問題ではないという立場をとっている³⁾。そのため「法身章」トルポバ註は仏身の数に関して、三身説を受け入れていると考えられる記述、四身説を受け入れていると考えられる記述、そのいずれでもない仏身論を前提としている記述が混在している。次節から、その3つを見ていくこととしよう。

2. AA そのものに対する立場

トルポバ註には「弥勒の諸法 (byams chos rnams) においては四身とも説かれ、また三身によって仏のすべての身がまとめられるとも説かれている⁴⁾」と述べている箇所がある。この“byams chos rnams”はいわゆる「弥勒の五法」のことだろうと思われる。そのうちの『中辺分別論』と『法法性分別論』には仏身論が説かれておらず、実際、トルポバ註「法身章」が引用する『法法性分別論』の1箇所⁵⁾は転依をテーマとしていて、仏身論と直接関係しない。他方、『大乘莊嚴經論』と『宝性論』が三身説の仏身論を説いていることは周知のことであり、実際、トルポバ註「法身章」が引用する『大乘莊嚴經論』31偈32回⁶⁾、『宝性論』24偈⁷⁾は四身説を説いていない。だとすると消去法から、四身説を説いているのは、当の註釈対象であるAA そのものであると考えざるを得ない。つまり、トルポバは仏身の数について議論することは無益と言いつつ、どうも『現觀莊嚴論』の立場は四身説であると判断しているように思われる。

またトルポバ註は「法身章」註釈の冒頭に、AA 第1章第17偈第1パーダを提示した上で、その偈を説明する『無垢光』の一節を引用する⁸⁾。意味が確定しづらいものの、どうも「自性身は区分基体であり、働きを含む残りの三身がそれから分かれた支分であるようだ」と述べているようである。だとすると、基体としての自性身と、それから分かれた三身というように、四身説を前提としているように読める。

他方で、「法身章」トルポバ註の構成自体は四身説をとっていない。一般にチベット撰述の註釈書は科文 (sa bcad) を示して、それに沿って体系的に註釈を展開していくことが多い。しかしトルポバ註にはそのような明示的な階層構造がない。そこで、主題転換の際にしばしば用いられる“da ni (今や)”で始まる箇所を手がかりにすると、「法身章」トルポバ註における該当箇所は冒頭部分を含めても3カ所しか見られない。すなわち、冒頭で「法身 (chos kyi sku)」、次に「受用身

(longs spyod rdzogs pa'i sku)」、最後に「變化身 (sprul pa'i sku)」である⁹⁾。また文章そのものの量を見ると、「法身章」全体19葉¹⁰⁾のうち、AA本文註釈より前の導入部だけで7葉弱 (169a-175b) 近く使用していて、「法身章」の三分の一を占める。そして「自性身・法身」4葉 (176Aa-179a)、「受用身」5葉 (179a-184a)、「變化身」3葉 (184a-187a) である。

それらを踏まえ、またAA本偈の説明のまとまりを手がかりに「法身章」トルポバ註の構成をまとめると、次の通りである。

a 導入部 (I 17a)		169a-
b 第8章本文註釈 (gzhung gi don la 'jug pa)		175b-
b.1 自性身・法身		
b.1.1 VIII 1	自性身総論	176Aa
b.1.2 VIII 2-6	二十一無漏法	176Aa-
b.1.3 VIII 7	無諍三昧	177a-
b.1.4 VIII 8	願智	178a-
b.1.5 VIII 9-11	常住をめぐる論義	178b-
b.2 受用身 (longs spyod rdzogs pa'i sku)		
b.2.1 VIII 12	受用身総論 (bstan pa)	179a-
b.2.2 rgyas par bshad pa		
b.2.2.1 VIII 13-17 (18-20)	三十二相 (mtshan bzang bshad pa)	179b-
b.2.2.2 VIII 21-32	八十種好 (dpe byad bzang po bshad pa)	181b-
b.3 變化身 (sprul pa'i sku)		
b.3.1 VIII 33-34ab	變化身総論	184a-
b.3.2 VIII 34 cd-40	二十七事業 ¹¹⁾	185b-187a

この構成だけから判断すると、トルポバはAAを三身説でまとめようとしているように見受けられる。

以上のようにトルポバ註はAAを四身説とも三身説とも確定していないようである。

3. 「法身章」トルポバ註の引用仏典

次なる手がかりとして、トルポバ註における引用を確認したい。

「法身章」には、直接的にはAAと関係のない引用も多く見られる。

大乘經典では、『金剛般若経』、『金光明経』、『楞伽経』2回、『宝雲経』、『央掘魔羅経』、『不可思議秘密経』の引用がある¹²⁾。これらの經典は仏身論を説いているが、引用箇所に限ると、三身を説く場合でも主として法身と色身の区別を中心

のテーマとしている。いずれにしても四身説ではない。

論書では、先述した『大乘莊嚴經論』、『宝性論』、『法法性分別論』以外に、章の名称のみであるが、龍樹の『中論』「如來の考察」章と「涅槃の考察」章が挙げられる¹³⁾。しかし『中論』はそもそも仏身論を説いているわけではない。

なおAAに説かれていない大円鏡智などの四智の説明にも、『大乘莊嚴經論』が引用されている。そこでトルボパは「この自性身そのものは、三身・四智の本質であり、四身・五智の本質であり」云々と解説していて、三身説をとっている『大乘莊嚴經論』も四身説で理解する余地があると考えている¹⁴⁾。

人物名の点からトルボパ註における引用を見ると、AAの作者とされる弥勒以外に、観音 (mgon po spyen ras gzigs dbang phyug, mgon po spyen ras gzigs, 'jig rten mgon po), 文殊 (rje btsun 'jam dbyangs mgon), サラハ (bram ze chen po dpal sa ra ha) という3人の名前が挙げられて引用がなされる。

これら3人のうち、サラハは「84人の成就者」として知られる密教行者の一人であり、引用は彼の主著とも言える『ドーハー・コーシャ』*Dohākoṣa* からのものである¹⁵⁾。トルボパはその引用を、色身も法身の変異 (mam 'gyur) であって仏身は区別できないがゆえに、仏身の数について論争することが無意味である根拠として扱っている。

「文殊」として名前を挙げられている人物はおそらく、『ナーマサンギーティ』の註釈を著したマンジュシュリーキールティ *Mañjuśrīkīrti* である¹⁶⁾。トルボパ註で言及される所説とほぼ同じ内容が、トルボパの主著『山法了義大海』*Ri chos nges don rgya mtsho* では、出典名を『自らの見解主張の略説』*Rang gi lta ba'i 'dod pa mdor bstan pa* (P no. 4610) と明らかにして引用されている¹⁷⁾。そこでは、変化身、受用身、法身、楽身、智慧身という五身が自性身から生じたものであると説かれている。

「観音」として名前を挙げられている人物は、『カーラチャクラ・タントラ』の註釈書である『無垢光』*Vimalaprabhā* の作者であるカルキン・プンダリーカ *Kalkin Puṇḍarīka* を指している。その『無垢光』からの引用箇所は、前節で言及した箇所も含んで複数に及び、四身説を説いている箇所や、仏身が十六身であると述べている箇所もある¹⁸⁾。また、やはり『無垢光』からの別の一節を引用した解説箇所では、トルボパは「仏身を四つとする立場から、先の三身とは別の自性身である」と指摘して、四身説を受け入れているように思われる¹⁹⁾。そして、その直後に明確に「自性身と法身の二つ」と述べて、四身説の前提と同じく、自性

身と法身が別の仏身であることを認めている²⁰⁾。

トルポバ註で言及される以上3人はいずれも密教関係の人物とみなすことができ、三身説でも四身説でもない仏身を認めている。そしてトルポバが仏身の数を議論すべきでないとする根拠となっている。

4. その他の手がかり

トルポバは「この唯一の自性身のみが究極の対象である (ngo bo nyid kyi sku gcig bu 'di nyid 'ba' zhig mthar thug gi don yin)」と指摘した上で、顕密双方における自性身の同義語を列挙する²¹⁾。顕教における同義語としては、通常の仏身論の用語では「法身」しか述べられていないのに、真言乗における同義語の中には、「自性身」や「法身」のほかに「受用身」「変化身」まで挙がっている。

その内容と関連するように、「自性身と法身の二つは勝義・法性の身のみであるが、二つの色身は仏自身の部分からは勝義・法性の身のみであるけれども、所化たる衆生には有法である事物の身として見え」云々とあり、さらに「法性の受用身と変化身 (chos nyid kyi longs sku dang sprul sku)」という概念が述べられる²²⁾。おそらくこの「法性の」という限定のついた受用身と変化身が、自性身の同義語としての受用身と変化身なのであろうと思われる。つまり同じ「受用身と変化身」という用語を用いていても、それぞれ勝義・法性のものと、そうではないものの2種類ずつあることをトルポバは認めているのである。

それらも考慮に入れると、トルポバ註では三身説ないし四身説の用語を用いていても、実際には四身以上の仏身を認めていると結論づけることができよう。

5. まとめ

以上見てきたように、トルポバは仏身の数について議論するのは無益であると主張する。しかしそのことは三身説や四身説を明確に否定することを意味せず、場合によって両者を使い分けている。その一方で、AAの註釈書であるにもかかわらず、AAと直接関係のない密教の見解も積極的に取り入れている。

これらを総合的に勘案すると、成功したかどうかは別の問題として、トルポバ註における仏身論は、歴史的にAA以降もさらに発展した密教の仏身論も視野に入れつつ、多くの仏典を一つの体系にまとめて説明したいという意図をもって説かれたものと結論づけることができよう。

- 1) トルボパ註は、彼自身がヴァスバンドゥ作と信じた、ダンシュトラセーナ作と伝えられる『除害論』 *gNod 'jom* (正式名称『聖般若波羅蜜十万・二万五千・一万八千広釈』 *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bum pa dang nyi khri lnga stong pa dang khri brgyad stong pa'i rgya cher bshad pa*. D no. 3803; P no. 5206) を主たる典拠とする(荒井1992; 谷口2008)が、「法身章」に関しては『除害論』の引用や言及が見られない。
- 2) トルボパは主著『山法了義大海』ではAA第1章第17偈を引用しつつ、アーリヤ・ヴィムクティセーナなどが三身説を主張し、他の論師たちが四身説を主張していることを指摘している(RNG 327; Hopkins 2006: 428).
- 3) DDT 170a3, 170a6-7.
- 4) DDT 170a6.
- 5) DDT 174a6-7.
- 6) 「法身章」註釈の導入部において IX 60-61, 63, 65-66 (以上、三身の区別), XXI 58 (一切相智性), IX 67-76 (大円鏡智などの四智)。「自性身」の註釈において XXI 43-44, 48, 47, 50-53, 55, 54, 56-58, 45, 46 (八解脱などの仏徳。うち第58偈は再掲)。「変化身」の註釈において IX 64 (変化身)。
- 7) 「法身章」註釈の導入部において IV 20-26, 29-30, 89-91 (影像としての仏), II 52 (摩尼珠のたとえ), III 1-3 (仏身の自利利他・勝義世俗)。「変化身」の註釈において II 53-56 (変化身), IV 85-88 (仏の九喩)。
- 8) DDT 169a4 (*VMP(I)* 43; D no. 1347, tha, 143b4-6).
- 9) それぞれ DDT 169a3, 179a4, 184a4.
- 10) 第176葉は *gong* と *'og ma* の2葉あり、順に“A”“B”で表すこととする。
- 11) トルボパ自身は「二十」と数えている (*las gsum po de nyid skabs 'dir rnam pa nyi shur phyé nas gsungs pa 'di lta ste// DDT 185a2*).
- 12) 『金剛般若経』 DDT 171b7-172a1; 『金光明経』 DDT 173b5; 『入楞伽経』 DDT 173b5-6, 179b1-2; 『宝雲経』 DDT 178a2; 『央掘魔羅経』 DDT 179a6-7; 『不思議秘密経』 DDT 185a6-7.
- 13) DDT 173b6-7.
- 14) DDT 175b6-7.
- 15) DDT 170a7 (D no. 2224, wi, 75b3-4).
- 16) シャキヤ2004.
- 17) DDT 169b4. Cf. RNG 328-329; Hopkins 2006: 430-431.
- 18) 四身説をとっているのは DDT 171a4 (Cf. *VMP(2)* 149; D no. 1347, da, 29a2-4; Wallace 2007: 11-12). なお RNG 330-331; Hopkins 2006: 432-433 には「尊者の言葉 (*rje btsun gyi zhal snga nas*)」として、同じ箇所を含む引用がなされている。また十六身を説いているのは、DDT 169b3 (Cf. *VMP(I)* 1; D no. 1347, tha, 107b4). 文脈から判断すると、「十六身」は変化身・受用身・法身・俱生身のそれぞれに身・語・意・智慧が結びつくことによる数字である。なお RNG 333; Hopkins 2006: 436 に、同じ箇所を含む引用がなされている。他の引用は DDT 173a2 (RNG 377; Hopkins 2006: 492 に『無垢光』を出典として明示した上で、ほぼ同じ箇所を引用している), 174a1, 174a2.
- 19) DDT 171b1.
- 20) DDT 171b2-5.
- 21) DDT 169a6-170a3.
- 22) DDT 171b2-5.

〈略号〉

- AA: *Abhisamayālaṅkāra-prajñāpāramitā-upadeśa-śāstra*. Ed. Th. Stcherbatsky and E. Obermiller. Bibliotheca Buddhica, XXIII. Delhi: Motilal Banarsidass, 1992.
- DDT: Dol po pa Shes rab rgyal mtshan. *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi rnam bshad mdo'i don bde blag tu rtogs pa*. (TBRC no. W21208, vol. 5, pp. 243–618; fols. 1a–187b. Boston: Tibetan Buddhist Resource Center. PDF in DVD-R).
- RNG: Dol po pa Shes rab rgyal mtshan. *Ri chos nges don rgya mtsho*. 阿旺更嘎・建阳乐住(編). 北京: 民族出版社, 2007.
- VMP(1): *Vimalaprabhā of Kalkī Śrī Puṇḍarīka on Śrī Laghukālacakratantrarāja by Śrī Mañjuśrīyaśas*, vol. 1. Ed. J. Upadhyaya. Rare Buddhist Texts Series, vol. 11. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1986.
- VMP(2): *Vimalaprabhāṭīkā of Kalkin Śrīpuṇḍarīka on Śrīlaghukālacakratantrarāja by Śrīmañjuśrīyaśas*, vol. 2. Ed. V. Dwivedi and S. S. Bahulkar. Rare Buddhist Texts Series, vol. 12. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1994.

〈参考文献〉

- 荒井裕明 1992 「ツォンカパの他空説批判——Yum gsum gnod 'joms を中心として——」『仏教学』33: 27–47.
- Brunnhözl, Karl. 2011. *Prajñāpāramitā, Indian "gzhan stong pas", and the Beginning of Tibetan gzhan stong*. *Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde*. Heft 74. Wien: Universität Wien.
- Conze, Edward. 1954. *Abhisamayālaṅkāra*. Serie Orientale Roma, no. 6. Rome: Is. M. E. O.
- Hopkins, Jeffrey. 2006. *Mountain Doctrine*. New York: Snow Lion Publications.
- 磯田熙文 1982 「Abhayākaragupta の Haribhadra 批判」『印度学仏教学研究』30(2): 1007–1012.
- 1985 「『Abhisamayālaṅkāra』の三身説と四身説」『印度学仏教学研究』34(1): 368–375.
- Makransky, John J. 1997. *Buddhahood Embodied*. New York: State University of New York Press.
- 望月海慧 2006 「Dol po pa の二諦説理解について」『佛教学』48: 21–51.
- 2007 「Dol po pa の二諦説理解について (II)」『身延山大学仏教学部紀要』8: 23–64.
- Nakamura Hodo. 2010. "The Classification of the Buddhakāya Theory in the *Abhisamayālaṅkāra*: The Interpretation of the Twenty-one Unfiled Qualities". *Journal of Indian and Buddhist Studies* 59(2): 1198–1202.
- . 2011. "Traditions of Commentaries Ascribed to Asaṅga and Vasubandhu on the *Abhisamayālaṅkāra*: Relationship with the Commentaries ascribed to Daṃṣṭrasena on the *Prajñāpāramitā*-literature". *Journal of Indian and Buddhist Studies* 59(2): 1262–1266.
- 佐久間秀範 1992 「『現觀莊嚴論』第八章をめぐるインド諸註釈家の分類——三身説と四身説——」『四天王寺国際仏教大学紀要』24: 1–30.
- シャキヤ, スダン 2004 「Mañjuśrīkīrti 釈を中心とした *Nāmasaṃgī* の一考察」『仏教学』46: 77–109.
- 庄司史生 2016 『八千頌般若経の形成史的研究』山喜房仏書林.
- ソナム・ギャルツェン・ゴンタ 1991 「トクメー・サンポによる『大乘莊嚴経論』菩提品の註釈について——四智説と五智説——」『日本西蔵学会会報』37: 2–10.
- Stearns, Cyrus. 1999. *The Buddha from Dolpo*. New York: State University of New York Press.
- 田中公明 2009 「チベット仏教における三身説と四身説の設定——『現觀莊嚴論』「法身章」所説の二十一種無漏智 zag pa med pa'i ye shes sde tshan nyi shu rtsa gcig po の解釈を中心

- に——」『日本西蔵学会会報』55: 131-139.
—— 2014 『般若学入門』大法輪閣.
谷口富士夫 1993 『西蔵仏教宗義研究 第六卷 チョナン派の章』東洋文庫.
—— 2002 『現観体験の研究』山喜房仏書林.
—— 2008 「トルボバの般若波羅蜜理解——現観莊嚴論註を中心として——」『印度学仏教学研究』57(1): 128-135.
—— 2010 「アーラヤ識とアーラヤ智」『印度学仏教学研究』59(1): 83-87.
—— 2018 「『現観莊嚴論』トルボバ註における三種の智慧」『印度学仏教学研究』66(2): 762-768.
Wallace, Vesna A. 2007. *The Kālacakra Tantra: The Chapter on Sādhana Together with the Vimalaprabhā Commentary*. New York: American Institute of Buddhist Studies, co-published with the Columbia University's Center for Buddhist Studies and Tibet House US.

〈キーワード〉 *Abhisamayāṅkāra*, Dol po pa, 三身説, 四身説

(名古屋女子大学教授, 文博)

新刊紹介

尾園絢一 著

パーニニが言及するヴェーダ語形の研究
重複語幹動詞を中心に

A5版・274頁・本体価格4,000円
東北大学出版会・2018年2月